［論　説］

投票参加のエピソード記憶が後の投票参加に与える影響

Episodic Memory and Electoral Participation

岡　田　陽　介

［論　説］

要　約

本稿は、認知心理学的な記憶研究のアプローチに基づき、「投票に参加した」ことにまつわるエピソード記憶（個人的な出来事や経験の記憶で、時間・空間に関連付けられる）が、その後の投票参加に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。JES Ⅱパネルデータの分析の結果、以下の点が明らかになった。(1)「投票に参加した」ことの正確なエピソード記憶は、後の投票参加を促進する効果を持つ。(2) 投票義務感は、「投票に参加した」ことにまつわる正確な想起を経由して後の投票義務感へと至る。(3) 投票参加に対するエピソード記憶の効果が特に重要性を持つのは、支持政党はあるが、その強度の弱い者においてである。「弱い政党支持」を特徴とする習慣的投票者は、「投票に参加した」ことにまつわる正確なエピソード記憶を繰り返し想起することを通じて形成されると考えられる。

The purpose of this article is to investigate the effect of political episodic memory on electoral participation based on the cognitive psychological theory. Episodic memory is the memory that is related to "time" and "place". Using the panel survey data (JES Ⅱ data), I shed light on the role of correctly recollected memory of voting. The results of analysis demonstrate, (1) correctly recollected episodic memory of voting promotes participation in the following election, (2) the sense of civic duty of participation makes the episodic memory of voting more correct, and the correct episodic memory in turn strengthen the sense of civic duty, (3) frequent recollection of the correct episodic memory forms the habitual voting in the long run.

Key Words: エピソード記憶、投票参加、習慣的投票、episodic memory、
electoral participation、habitual voting

1. はじめに

投票行動研究の歴史を辿ると、そこにはより外的な規定要因から意思決定のブラックボックスの中へという分析の焦点の移動が認められる。例えば池田 (1991) は、投票行動研究が有権者のデモグラフィックな特性による分析から、政治的態度などの心理的要因を導入した経緯に触れ、かつての投票行動研究が「心のメカニズム」に十分注意を払ってこなかった点を指摘し、さらに自身の研究ではスキーマ理論等の認知心理学的な理論やモデルを導入し、そうした「心のメカニズム」をより内側から解明することを試みている。

本稿は、こうした認知心理学的な変数として従来の投票行動研究ではあまり取り上げられてこなかった「記憶」、特に「エピソード記憶」に焦点を当て、それが投票参加に及ぼす影響を明らかにし、さらにそれを通じて、これまでの投票参加研究の知見に対して認知心理学的な側面からの再解釈を施すことを目的とする。

2. エピソード記憶・意味記憶・スキーマ

Tulving (1972, 1983) は、長期記憶をエピソード記憶 (episodic memory) と意味記憶 (semantic memory) とに分類した[1]。エピソード記憶とは個人的な出来事や経験を記憶したり思い出したりする記憶であり、時間・空間に関連付けられた記憶で、「覚えている」(remember) という想起意識[2]を伴うのに対し、意味記憶とは、個人にかかわることとは独立した、世界に関する知識の記憶であり、「知っている」若しくは「分かる」(know) ということに関連する記憶であるとされる。他方、両記憶は、ともに情報や知

識の習得、保持、利用に関連した記憶のシステムであり、その真偽をたずねることや内観が可能である (Tulving, 1983)[3]。また両者とも、意識的想起が可能で、その内容について述べることが可能な宣言的記憶 (declarative memory) である (Squire, 1987)[4]。両記憶の関連について Linton (1982) は、日誌法による自身の 6 年間に渡る記憶調査に基づき、エピソード記憶は繰り返されることによって意味記憶へと変形していくと主張する。つまり、知識の獲得という点からみれば、個々のエピソードが繰り返されることで時間的・空間的な情報が抜け落ち、意味記憶としての知識がもたらされるということになる。

以上の議論に従えば、有権者の政治的な記憶は、日常生活の中で触れる様々なエピソードに関する記憶と、そうしたエピソード記憶の蓄積による意味記憶（＝政治的な知識）に分けることができる。例えば、選挙に関する記憶は、「前回の選挙では投票をした」、「選挙期間中、候補者と握手をした」、「駅前で演説しているのを見た」、「掲示板で候補者のポスターを見た」といった時間・空間に関連付けられ、「覚えている」エピソード記憶と、その繰り返しによって得られる、「○○候補は△△党の候補である」、「××候補は当選何回である」といった知識として「知っている」意味記憶とに分類することが可能であろう[5]。

また、エピソード記憶とスキーマとの関連については、日常のエピソード記憶が繰り返され、構造化されてスキーマへと発展すると考えられる (Nelson, 1978)。言い換えれば、スキーマ内の知識の多くは繰り返されたエピソードによってもたらされ、その一方でスキーマは新しいエピソードを解釈するのに用いられる (Cohen, 1986, 1989)。ただし、すべてのエピソード記憶が意味記憶に回収され、スキーマとして構造化されるわけではなく、場合によっては個人的なエピソードはそのままの形で長期にわたり

詳細または正確に保持される (Cohen, 1986)。言い換えれば、抽象化や一般化されない一回限りの経験であっても、エピソード記憶として正確に、鮮明に保持されうる。有権者は、ただ一度の経験であっても、その記憶に基づいて判断を下すことができるのである[6]。

3. 投票行動研究におけるエピソード記憶

先述の通り、従来の投票行動研究においてエピソード記憶の概念が明示的に用いられることはほとんどなかった。ただし、これまでに提出された投票行動モデルのいくつかは、そこにおけるエピソード記憶の働きを暗黙のうちに仮定していると考えることができる。そこで、分析に先立って、そうしたモデルの中で重要と思われるものについて触れておきたい。

3.1 業績投票と習慣的投票

Fiorina (1981) は、有権者は政府の業績の良し悪しをもとに判断を行い投票するという業績投票モデルを提唱した。これは、回顧的投票ともいわれるが、回顧とはすなわち、過去を振り返ることである。Fiorinaは「直接的な経験による評価」(SRE: simple retrospective evaluations) と「間接的な情報による評価」(MRE: mediated retrospective evaluations) とを挙げる。前者は、自分自身の家計の状態や仕事上の経験といった、個人の直接的な経験や印象から得られる評価であり、後者は、政府のパフォーマンスに関する、マスメディア情報などから形成される評価である。記憶の視点からみれば、前者は有権者のエピソード記憶によってもたらされる評価であり、後者は、定性的な評価、つまり、意味記憶的な評価を含んでいると考えられる[7]。

また限られた情報処理能力の下で、有権者は認知的倹約家として行動するとされるが (Taylor, 1981)、有権者にとって認知的負担の少ない投票方法の一つが、習慣的投票である[8]。Richardson (1986) は日本における投票行動の特徴として、強い政党支持を持たないにもかかわらず、一貫して同一政党に投票を行う習慣的投票者の存在を示した。習慣的投票は、有権者の過去の投票に基づく。つまり、「いつもこの政党に投票している」という、有権者自身の投票にまつわるエピソード記憶が、次の選挙における同一政党への投票をもたらしていると考えられる。

3.2　政党スキーマ

投票行動研究における記憶研究アプローチの代表的なものとしてスキーマ研究がある。スキーマとは、「特定事象に関する属性的・因果的・相関的・規約的な知識や信念の構造」（池田，1991）である。池田ら（池田，1991, 1994, 1997；池田・西澤，1992）は、政党支持概念に代わる変数として政党スキーマを提唱する。政党認知としてのスキーマは、投票方向に関する大きな説明力を持つが、他方、投票に参加する動機を十分に説明するものではない。確かに、投票方向が決まることで参加がもたらされるとも考えられるが、より直接的に投票参加の動機を説明する変数が必要とされる。これに関しては、例えば平野ら（平野・亀ヶ谷，1994）は、「投票するかしないか」に関する意思決定において、動機的なスキーマが主として働くとし、投票を促進するものとして、「苦戦しそうな政党を助けたい」や「棄権はできるだけしたくない」といった下位スキーマや、Richardson (1986) の習慣的投票に関連した「いつも投票している」という「習慣投票スキーマ」を挙げている。

3.3 政治的情報接触と参加経験

境家 (2005a) は、選挙情報への接触が投票参加を促進すること明らかにし、堀内ら（堀内・今井・谷口，2005）は、フィールド実験の結果から、情報量の増加は投票参加を増加させることを示した。また、境家 (2005b) は、有権者が触れる選挙情報の源を、「直接キャンペーン」、「マスメディア」、「パーソナル」という 3 つのルートに分け、日本における、「直接キャンペーン」ルートへの接触率の高さを指摘している[9]。これらの研究は、政治的な情報への接触が投票参加を促進することを示すが、有権者にとって、情報はどのルートを辿ろうとも、すべて有権者の個人の経験として受け止められ、政治や選挙にまつわるエピソード記憶として保持されると考えられる。また、境家は「日本の選挙過程においては、政治的情報媒介者 intermediary を経由しない『0 段階』あるいは『無段階』の情報フローが（他のルートと比較して）相当量存在する」（境家，2005b, 167）とするが、これをエピソード記憶の観点から見れば、その特徴である、時間的・空間的に体制化された、政治や選挙にまつわる直接的、個人的な経験のエピソード記憶が相当量記憶されていると考えることが出来よう。

また、政治や選挙にまつわる直接的な経験という点で、荒井 (2006) は、投票をはじめとする 6 項目の政治参加形態を用いて、参加経験とその評価が後の参加に対して影響を与えることを示している。また、過去の参加経験そのものが次回の参加に肯定的に影響することも示している。ここでいう参加経験とは、有権者にとってのエピソード記憶と捉えることが可能である。つまり、有権者の参加にまつわるエピソード記憶が後の参加行動に対しても効果を持つといえる。

4. 仮説と分析方法

以上、従来の投票行動研究とエピソード記憶の関連について見てきた。本稿では、自分自身の投票参加に関するエピソード記憶がその後の投票参加に及ぼす影響にテーマを絞って、以下のような仮説を検証する[10]。

「投票に参加したことについての正確なエピソード記憶は、その後の投票参加を促進する。」

この仮説は、以下のような推論によって導かれる。すなわち、過去の投票参加にまつわるエピソード記憶は、投票の意思決定に際して一つの判断材料を提供する。そして、政治参加経験がその後の参加を促進するという知見から（荒井，2006)、習慣的投票者 (Richardson, 1986) における「いつも投票している」という記憶（平野・亀ヶ谷，1994）は、参加経験とその後の行動を媒介する要因として働いていると考えられる。

ただし、この仮説には次の 2 つの点についての限定が付されている。第一に、投票参加に関するエピソード記憶がこうした機能を果たすのは、それが「正確な記憶」である場合に限られるということである。すなわち、一方において、現実に参加した経験があっても、それが正確な記憶（「投票に行ったという記憶」）として保持されなければ、その経験がその後の参加を促進することはないと考えられるが、他方において、現実には参加しなかったにもかかわらず、参加したという不正確な記憶を持った場合にも、その不正確な記憶はその後の参加を促進することはないと予想される。これは、不正確な記憶が忘却によってもたらされ、情報としての確信度に欠けると考えられるためである[11]。

第二に、同じ正確な記憶でも、棄権したことについての正確な記憶は、不正確な記憶と比較してその後の投票参加に明確な影響を及ぼすことはないと考えられることである。これは、棄権が投票参加のような明確な行為ではないことによる。仮にこの仮説とは異なり、棄権についての正確な記憶がそれ以後の選挙における投票参加を抑制するという効果を示したならば、その結果は民主主義の将来を考える上で重大なインプリケーションを持つものとなろう。

以上の仮説の検証を中心に、以下では次のような分析を行う。まず、「実際に投票したかしないか」と「記憶が正確か否か」によって回答者をパターン分けした上で、記憶の正確さに影響を与える心理的要因を明らかにする。次いで、投票参加に関するエピソード記憶が、政治的関心、投票義務感、政党支持強度などにどのような影響を与えているのか、さらに投票参加自体に及ぼす影響はどのようなものであるのかを明らかにする。ここで、政治的関心や投票義務感に対するエピソード記憶の影響をも分析対象とするのは、エピソード記憶が、意味記憶やスキーマの形成に寄与する(Nelson, 1978; Linton, 1982; Cohen, 1986) という点から考えて、それがこうした政治的態度をも規定する要因となっているのかを確認し、またこれらの態度を経由しての投票参加に対する間接的な効果をも検討するためである。

さらに、先述のように習慣的投票者の特徴は、強い政党支持ではなく、弱い支持であり、そこでは、弱いながらも何らかの政党支持を持つか否かの区別が求められる。そこで、分析に際しては支持政党を持つ回答者のみの分析と支持なしの回答者も含めた分析を行い、その結果を比較する。

分析に使用するデータは、JES II 調査データ [12] である。有権者の記憶、特に記憶の正確さを分析するにあたっては、パネル調査データが求められ

る。JES Ⅱ調査は7波に渡るパネル調査であり、93年と96年の衆院選を含んでいる。96年調査では、93年衆院選での投票経験の質問が設定されており、両調査の回答の組み合わせで、その正確さを確認することができる[13]。

5. 分析結果

5.1 エピソード記憶としての投票参加想起

表1は93年衆院選で投票に参加したか否かの想起――以下、投票参加想起[14]――(96年調査）と実際の投票参加（93年調査）とのクロス表である[15]。これをみると、「投票参加想起－実際の投票」の順に、投票に参加したことについての正確なエピソード記憶である「投票－投票」の割合が最も多く、次いで不正確なエピソード記憶である「棄権－投票」、「投票－棄権」、最後に、不参加の正確なエピソード記憶である「棄権－棄権」となった。「投票－投票」が89.3%と、投票に参加したことについての正確な想起をする割合が高いものの、不正確な想起の割合も一定数存在して

表1　投票参加想起と実際の投票

93年の投票参加想起（96年調査）	実際の投票（93年調査） 投票	棄権	合計
投　票	1,064 (89.3%)	31 (2.6%)	1,095 (91.9%)
棄　権	70 (5.9%)	26 (2.2%)	96 (8.1%)
合　計	1,134 (95.2%)	57 (4.8%)	1,191 (100%)

※数値は度数と全体に占める%

いる。不正確な想起を足し合わせると（「棄権－投票」と「投票－棄権」との計）、8.5% であった。通常、投票行動のサーベイ調査では、投票率の過大推定が問題がとなる（宮野，1986）。本稿のデータも例外ではなく、以下の分析結果の解釈に当たってもその点の留意が必要である。こうした過大推定の原因の一つに、実際には投票に参加していないにもかかわらず「参加した」と答えるような意図的な誤答を行う非協力的な標本の存在があるが、パネル調査では、調査に協力的な標本が残り、非協力的な標本が欠損することを考えれば[16]、こうした意図的な誤答については過度に心配する必要はないかもしれない。

5.2　正確な投票参加想起をもたらす心理的要因

投票参加想起の正確さがどのような要因によって規定されているのかを探るため、政治的関心、投票義務感、政党支持強度（支持なしの回答者を含む）を独立変数とし、各想起パターンを従属変数とする多項ロジスティック回帰分析を行った。これら 3 つの独立変数に関しては、記銘時（93 年調査）のものと想起時（96 年調査）のものとの両者が使用可能である。予備的な分析で、投票参加想起に対しては想起時ではなく、記銘時の効果があることが認められた。この結果は、記憶の正確さに影響を及ぼすのは、想起時ではなく記銘時におけるコミットメントの強さであるという常識的予測とも一致する。そこで、分析には 93 年の政治的関心、投票義務感、政党支持強度を独立変数として投入した。また、コントロールのためのデモグラフィック変数として年齢と性別を投入した[17]。なお、従属変数の参照カテゴリは「棄権－棄権」とした。結果は表 2 の通りである。

この結果を見ると、有意な結果が得られたのは、「投票－投票」に対してのみとなった。まず、デモグラフィックな要因では年齢の効果が有意で

表 2　想起パターンに対する心理的要因の効果（多項ロジスティック回帰）

想起パターン		係数	標準誤差	Wald
投票－投票	切片	−4.706*	1.877	6.284
	性別	−.549	.625	.771
	年齢	.048*	.020	5.673
	政治的関心 93	1.190**	.365	10.624
	投票義務感 93	1.675***	.404	17.204
	政党支持強度 93	1.109*	.468	5.603
投票－棄権	切片	−3.521	2.282	2.380
	性別	.139	.773	.032
	年齢	.027	.024	1.224
	政治的関心 93	.563	.435	1.676
	投票義務感 93	.583	.480	1.477
	政党支持強度 93	.301	.569	.279
棄権－投票	切片	−2.961	2.010	2.170
	性別	−.272	.675	.162
	年齢	.035	.022	2.598
	政治的関心 93	.576	.390	2.176
	投票義務感 93	.657	.431	2.317
	政党支持強度 93	.801	.495	2.615
	N	949		
R^2	Cox & Snell	.145		
	Nagelkerke	.253		
	McFadden	.184		

※参照カテゴリは「棄権－棄権」　　*p<.05　**p<.01　***p<.001

あり、年齢が高いほど、投票に参加したというエピソードの正確な記憶を有しており、参照カテゴリが「棄権－棄権」であることから、年齢が低いほど棄権したというエピソードの正確な記憶を有していることが示された。年齢が高ければ、投票経験の回数も多いと考えられる。調査では、前回選挙での投票参加についての想起が求められているが、投票参加にまつわるエピソード記憶が複数の参加経験で構成されているとすれば、様々な想起の手がかりを有していると考えられる。次に、心理的要因では、政治

的関心、投票義務感、政党支持強度のすべての変数で有意な効果を示している。これらの係数は、すべて正の係数であることから、これらの結果は、政治的関心、投票義務感、政党支持強度において、それらの要因が高まるほど、投票に参加し、しかもそのことを正確に記憶しているということになる。他方で、「棄権－棄権」を基準とすると、「棄権－棄権」、「投票－棄権」、「棄権－投票」の 3 カテゴリ間では、顕著な差は見られないといえよう。

記銘時のコミットメントの強さは、投票に参加し、しかもそのことを正確に記憶していることの可能性を高めるが、不正確な記憶、すなわち、正確な記憶を伴わない参加経験や、参加経験に基づかない誤った（参加の）記憶は、記銘時のコミットメントの強弱からは説明できない。つまり、記銘時のコミットメントが強ければ、それらにまつわるエピソード記憶が多く保持され、正確な想起の手がかりを多く有していると考えられる。しかし、不正確な記憶が忘却からもたらされるとすれば、仮に強い記銘時のコミットメントあったとしても、それらにまつわる様々なエピソード記憶が忘れ去られ、想起の手がかりとして機能しないとも考えられる。

5.3　投票参加想起パターンが心理的要因に与える効果

次に、想起パターンの違いが、その後の政治的関心、投票義務感、政党支持強度といった心理的要因にどのように影響するのかについて検討する。表 3 は、想起パターンが心理的要因に与える効果を分析した重回帰分析 (OLS) の結果である。従属変数は 96 年における政治的関心、投票義務感、政党支持強度（支持ありのみ・支持なしを含む）で、独立変数は、デモグラフィック変数、及び、それぞれの従属変数に応じた、93 年調査の政治的関心、投票義務感、政党支持強度、そして、各想起パターンのダ

表3　心理的要因に対する想起パターンの効果（重回帰分析：OLS）

	政治的関心96	投票義務感96	政党支持強度96 支持あり	政党支持強度96 支持なし含む
性別	−.148***	−.058*	−.038	−.055
年齢	.050	.172***	.092**	.138***
政治的関心93	.423***	−	−	−
投票義務感93	−	.227***	−	−
政党支持強度93(支持あり)	−	−	.365***	−
政党支持強度93(支持なし含む)	−	−	−	.373***
投票－投票	−.001	.198**	.050	.088
投票－棄権	.023	.010	.015	.030
棄権－投票	−.034	.013	−.012	.028
N	1,051	984	709	1,028
adj R^2	.255	.174	.155	.194

※数字は標準化偏回帰係数　　*p<.05　**p<.01　***p<.001

ミー変数である。想起パターンの参照カテゴリは「棄権－棄権」である。

分析の結果、効果が認められたのは、それぞれ、93年調査の政治的関心、投票義務感、政党支持強度であった。この結果は、93年の要因が96年の要因を説明するということである。両者は同一の調査項目であるものの、調査年度の違いがあり、それは必ずしも同一のものではないが、潜在的には極めて近い政治的態度を測定しているとも考えられ、その関連が高いことは十分に予測できる結果である。他方、他の変数の結果を見ると、コントロールのためのデモグラフィック変数の効果は一部で認められるが、想起パターンについては、政治的関心、政党支持強度に対してその効果は見られない。しかし、投票義務感に対しては、想起パターンのうち、「投票－投票」の効果が認められる。つまり、96年の投票義務感に対しては、93年投票義務感でコントロールされてもなお、「投票－投票」の有意な効果が認められたということである。これは、表2の分析で93年投票義務感が「投票－投票」を高める効果を持っていたことと照らし合わせれ

ば、93 年投票義務感が、「投票－投票」という投票に参加したことについての想起の正確さを経由して 96 年投票義務感を高めているといえよう。

これまでの投票参加研究において、投票義務感は説明力の高い独立変数の一つとして結論付けられることが多かったが、投票義務感そのものの性質についてや、なぜそのような義務感が形成されるのかについては、あまり論じられてこなかった。しかし、投票義務感が投票に参加したことについての正確な記憶をもたらし、そのことが更なる投票義務感を生むという一連のプロセスを示した今回の結果によって、投票義務感を形成する一要因として、投票に参加したことについての正確な記憶を位置づけることが出来よう[18]。また、このことは、エピソード記憶が実際に意味記憶やスキーマへと転じる可能性を示唆しているとも考えられる。

5.4　エピソード記憶が 96 年投票に与える効果

最後に、エピソード記憶が投票参加に与える影響を探るため、96 年投票参加を従属変数とする 2 項ロジスティック回帰分析を行った。表 4 は、性別、年齢、96 年調査における政治的関心、投票義務感、政党支持強度、想起パターンのダミー変数（参照カテゴリは「棄権－棄権」）を独立変数とした分析結果である。

この結果を見ると、支持なしを含むかどうかに関わらず、想起パターンでは、「投票－投票」のみが有意な結果となった。この結果から、「投票に参加したことについての正確なエピソード記憶はその後の投票参加を促進する」という仮説は支持されたといえよう。これを別の面から見れば、正確な記憶を伴わない参加経験や、参加経験に基づかない誤った（参加の）記憶は、いずれもその後の参加を促進することはない。また、棄権したことについての正確な記憶が、誤った記憶に比べてその後の参加を抑制する

表 4　投票参加に対する想起パターンの効果（2 項ロジスティック回帰）

	支持あり			支持なし含む		
	係数	標準誤差	Wald	係数	標準誤差	Wald
性別	−.083	.362	.053	.095	.259	.135
年齢	−.006	.014	.201	.014	.009	2.294
政治的関心 96	.501*	.228	4.853	.524**	.159	10.870
投票義務感 96	.429	.257	2.790	.605**	.185	10.671
政党支持強度 96	.161	.332	.234	.962***	.230	17.555
投票－投票	2.088*	.908	5.287	1.504**	.521	8.320
投票－棄権	−.011	1.041	.000	−.016	.662	.001
棄権－投票	−.472	.924	.260	−.448	.569	.619
定数	−.688	1.484	.215	−3.109**	.902	11.882
N		799			1,014	
Nagelkerke R2		.237			.329	

*p<.05　**p<.01　***p<.001

ということもない。

また、政党支持強度は、支持を持つ回答者のみの分析では有意な結果とはならなかったが、支持なしを含む分析では有意となった。これは、投票参加に対して効果を持つのは、政党支持の強度ではなく、弱い支持であっても支持を持つことであると考えられる。また、興味深いのは、支持なしを含む分析では投票義務感が有意な効果を持つものの、支持を持つ回答者のみの分析では、有意な効果は認められない。つまり、支持政党を持った有権者の投票参加において効果を持つのは、支持の強度や投票義務感ではなく、投票に参加したことについてのエピソード記憶であるといえる。

これまでの分析結果から総合的に考えると、弱い支持であっても、投票に参加することが、その参加に関する正確な記憶を媒介として、その後の投票を促進するという習慣的投票者の存在が示唆される。言い換えれば、習慣的投票者は、投票に参加したことについてのエピソード記憶の想起によって投票参加へと導かれると考えられる。

6. 結論と含意

本稿の目的は、有権者の投票参加に関するエピソード記憶に着目し、それがその後の投票参加に与える影響を分析することを通じて、投票行動におけるエピソードの記憶の重要性を明らかにすることにあった。分析の結果得られた主な知見とその含意は次の通りである。(1) 投票に参加したことについての正確なエピソード記憶は他の心理的な要因をコントロールしてもなお、投票参加を促進する。これにより、投票行動研究において、有権者のエピソード記憶に着目するというという新たなアプローチの意義を確認することができた。(2) 投票義務感は、投票参加を促進すると同時に、その正確な想起を経由して後の投票義務感へと至る。これは、投票義務感が投票参加をもたらし、それがさらにエピソード記憶として繰り返し想起される中で、更なる義務感を生むということを意味する。このことは、より一般的に、エピソード記憶が実際に意味記憶やスキーマへと転じる可能性を示唆するものといえる。(3) 政党支持強度の効果から、投票参加とそのエピソード記憶との関連で重要なのは、支持の強度ではなく、弱いものであっても支持を持つか否かであることが示された。Richardson (1986) の習慣的投票者の議論は、政党支持の弱さの中での習慣的な投票であった。「いつも投票している」というエピソード記憶が、その想起を通して弱い政党支持者においても効果を持つ。すなわち、これが習慣的投票のメカニズムそのものである。

これらの結果は、どのような有権者の姿を描き出すのか。投票に参加したことについてのエピソード記憶は、繰り返し想起される中で、投票義務感のような心理的要因を強化する一方で、エピソード記憶そのものが直接的にも投票参加を導く。投票参加を繰り返した有権者においては、投票に

参加し、候補者に投票するというスクリプトが形成されていると考えることも可能である。

有権者のエピソード記憶に焦点を当てた研究は、まだまだ研究途上である。そこで、本稿では明らかに出来なかった今後の研究課題を整理することで、本研究の持つ可能性を示したい。まず、投票に参加したことについてのエピソード記憶には誰に投票を行ったのかという投票方向のエピソード記憶も付随する。本稿では、方向についての記憶は扱えなかった。また、投票行動研究における、エピソード記憶と意味記憶の測定方法も大きな課題である。さらに、本稿では有権者の意思決定のプロセス自体を十分検討することが出来なかった。これらについての分析を進めることが出来れば、政治的諸態度や、政党・候補者に関するイメージと記憶との関連にまつわる、よりダイナミックな分析が可能になり、有権者の「心のメカニズム」の解明が更に進むであろう。

謝辞

本稿で使用したJESⅡデータは、平成5～9年度文部省科学研究費特別推進研究「投票行動の全国的・時系列的調査研究」に基づく「JESⅡ研究プロジェクト」（蒲島郁夫、綿貫譲治、三宅一郎、小林良彰、池田謙一）が行った研究成果である。なお、データは日本選挙学会 (http://wwwsoc.nii.ac.jp/JESa/) より提供を受けた。データの使用をお認め頂いたことに感謝致します。また、本稿は、2006年度日本選挙学会における報告論文「有権者の記憶と投票行動―投票参加の記憶が後の投票行動に与える影響―」（2006年5月21日：上智大学）に加筆・修正を施したものである。当日参加された方々から貴重なコメントを頂いた。心より感謝申し上げる。

註

1. 記憶は、保持される場所によって感覚記憶・短期記憶・長期記憶に分けられ、またそのプロセスからは記銘・保持・想起の段階に分けられる。エピソード記憶は、長期記憶上に保持されるものである。本稿では上記の3段階中、保持・想起を主に扱う。もちろん、記銘のプロセスも重要な要因であるが、記銘を扱うには様々な

要因をコントロールした実験室的な環境が求められる。本稿で用いるデータはサーベイによるものであるため、こうしたコントロールは行われていない。従って、本稿では記銘のプロセス自体は扱わないが、記銘に影響を与える要因については検討を加える。

2. 想起意識という点では、潜在記憶 (implicit memory) と顕在記憶 (explicit memory) との観点から両記憶を分類することも可能である。潜在記憶とは「自分の経験として思い出す意識、すなわち特定事象の想起意識のない記憶」（太田，1995, p. 209）であり、顕在記憶とは、「想起意識のある記憶」（同，p. 209）である。エピソード記憶は想起意識を伴う顕在記憶に、意味記憶は想起意識を伴わない潜在記憶に分類される (Schacter & Tulving, 1994)。
3. 内容の真偽をたずねることや内観可能な特徴から命題記憶 (propositional memory) とも呼ばれる (Tulving, 1983)。
4. Squire (1987) は長期記憶を宣言的記憶と技能や認知的操作の記憶である手続き記憶 (procedural memory) とに分類した。命題記憶は宣言的記憶に分類される。
5. 「○○候補は△△党の候補である」といった知識としての記憶も、TV ニュースを見たという自己の経験に裏打ちされるような場合にはエピソード記憶に分類できる。Tulving (1983) は、両記憶は相互依存的であることを指摘し、意味記憶システムに向けられた質問であっても、エピソード内容の意味的側面を習得した後であれば、エピソード記憶システムから想起した情報をもとに答えることが可能であるとしている。
6. なお、スキーマと意味記憶は、知識を対象としている点で類似性を持つが、知識としてのスキーマは「語彙の内的構造の表現に終始した従来の意味記憶 (semantic memory) 研究と立場を異にする。」（川崎，1985, p. 172）とされる。つまり、スキーマは意味記憶と異なり、単なる知識構造としてだけでなく、一連の行動やスクリプトやステロタイプへの広がりを持っている。
7. マクロレベルのアグリゲートデータ分析においても、記憶の性質に着目した分析が報告されている。中村 (2006) は時系列分析の中で、政党支持率、内閣支持率はともに、一時点で受けたショックの影響が長期間にわたって影響が継続するという長期記憶性を示している。
8. 有権者の認知的負担の少ない投票方法という点では、Lodge ら (Lodge, McGraw & Stroh, 1989; Lodge & Stroh, 1993; Lodge, Steenbergen & Brau, 1995) は、印象駆動型 (impression-driven) の処理を提唱する。そこでは、有権者はキャンペーンの詳細ではなく、それらの情報によって形成された知識構造やカテゴリ、スキーマを参照することで、全体的な印象から候補者の評価を行うとされる。

9.　具体的には次のようなチャンネルが挙げられている。例えば、「直接キャンペーン」ルートには、候補者ポスター、候補者ビラ、選挙公報、連呼、街頭演説などが、「マスメディア」ルートには、候補者経歴放送、候補者新聞広告、候補者政見放送、テレビ選挙報道、「パーソナル」ルートには、家族の話し合い、友人・親戚のすすめ、熱心な人の勧誘などが含まれる（境家，2005b）。

10.　候補者や政党に関するエピソード記憶や、マスメディアによって報道された政治情勢についてのエピソード記憶と投票行動との関連については稿を改めて論じたい。

11.　これまでの投票行動研究において、調査における標本の不正確な記憶、記憶違いや誤答は欠損値として扱われることが多く、記憶違いそのものに焦点が当てられることはあまり多くなかったが、一方で、社会調査における誤答とバイアスとの関連では、多くの研究が見られる（宮野，1986；岩崎，1992）。

12.　分析に使用した各選挙年と調査各波の対応は次の通り。93 年衆院選（1・2 波）、96 年衆院選（6・7 波）。その他詳細は『JES Ⅱコードブック』（蒲島，他，1998）を参照されたい。

13.　分析に用いた変数とコーディングは以下の通り。〈属性〉「性別」：「1＝男性、2＝女性」、「年齢」：「調査時における満年齢」；〈投票参加に関する変数〉「投票参加（2 波、7 波）」：「ところで、先日の衆議院選挙では、あなたは何党の政党に投票しましたか」という質問のうち、「政党名または無所属の回答」、「投票に行ったが誰に投票したか忘れた」＝1、「棄権した」＝0、（ただし、7 波については小選挙区）；「93 年の投票参加想起（6 波）」：「3 年前の自民党が負けて政権から離れた衆議院選挙では、あなたは投票しましたか」という質問のうち、「投票した」＝1、「投票しない」＝0；「想起パターンのダミー変数」：「96 年調査時における 93 年投票の想起と、実際の投票の組み合わせ」＝1、0；〈心理的要因に関する変数〉「政治的関心（2 波、7 波）」：「選挙のある、なしにかかわらず、いつも政治に関心を持っている人もいますし、そんなに関心を持たない人もいます。あなたは政治上のできごとにどれ位注意を払っていますか」という質問のうち、「全く注意していない」＝1 から「いつも注意を払っている」＝4 の 4 段階；「投票義務感（1 波、6 波）」：「投票に行くかどうかは有権者が決めることなので、必ずしも選挙に参加しなくてもよい」＝1、「有権者はできるだけ選挙に参加した方がよい」＝2、「投票にいくことは有権者の義務であり、当然、選挙に行かなくてはならない」＝3；「政党支持強度（2 波、7 波）」：「あまり熱心ではない支持者」＝1、「わからない」＝2、「熱心な支持者」＝3、（ただし、支持なしを含めた分析では、「支持なし」＝0 を追加）；〈調査期間〉「2 波調査日と 6 波調査日の差」。

14. 投票参加のエピソード記憶の想起を考える際、「参加したこと」と「参加していないこと」との両想起が考えられる。本稿で投票参加想起という場合「参加したか否か」という両者を含んだ意味で用い、仮説で用いた「参加したこと」の想起とは区別する。
15. DK・NA を含んだパターンの集計も行ったが、該当ケースの存在しないパターンも見られたため、分析からは除外した。
16. 本稿で用いた JES II データでも、非協力的な標本、つまり、強い拒否等によって、後のパネルで調査不能になった標本が存在している（蒲島，他，1998；相田・池田，2005）。
17. 記憶の忘却を考慮すれば、調査間の日数も考慮しなければならない。93 年調査と 96 年調査の間の日数が開くほど、忘却がもたらされる可能性がある。従って、予備的な分析で、調査間日数を投入した分析も行ったが、有意な結果とはならなかった。これは、両調査の間には 3 年という間隔があるが、標本間の調査日数の違いが最大でも、17 日（平均 8.72 日）であり、調査日の違いは 3 年という間隔に対して、およそ 1% 程度の違いでしかないことに由来すると考えられる。
18. 投票義務感の性質について、岡田 (2007) は、日本における投票義務感を、「水平的な協調に対する義務感」と「垂直的な同調に対する義務感」との 2 つの側面に分け分析を行い、その両側面が投票参加を高める効果を持つとしている。また、投票義務感を高める要因として、岡田 (2003, 2007) は社会関係資本を挙げている。岡田 (2007) は、社会関係資本を「信頼、協力、規範共有の経験の蓄積によってもたらされる、自発的協力を導き、非協力行動（フリーライド）を阻害する心理的要因」と定義するが、これは、社会関係資本にまつわるエピソード記憶の蓄積が投票義務感を形成すると捉えることも可能である。その意味では、エピソード記憶が投票義務感を形成するという点で本稿の分析結果とも共通する部分もあり興味深い。エピソード記憶と投票義務感との関連については、今後、更に分析を進めていきたい。

参考文献

相田真彦・池田謙一．2005.「縦断的調査における非等確率抽出と欠測の問題」『選挙学会紀要』第 5 号，5–21 頁.

荒井紀一郎．2006.「参加経験とその評価にもとづく市民の政治参加メカニズム」『選挙学会紀要』第 6 号，5–24 頁.

Cohen, G. 1986. Everyday memory. In Cohen, G., M. W. Eysenck, & M. E. Le Voi (eds.). *Memory: A Cognitive Approach.* Open University Press, pp. 15–56.（長町三

生監修・認知科学研究会訳．1989.『記憶』海文堂，1–58 頁.）

Cohen, G. 1989. *Memory in The Real World*. Lawrence Erlbaum Associates.（川口潤訳者代表，浮田潤・井上毅・清水寛之・山祐嗣共訳．1992.『日常記憶の心理学』サイエンス社.）

Fiorina, M. P. 1981. *Retrospective Voting in American National Elections*. Yale University Press.

平野浩・亀ヶ谷雅彦．1994.「スキーマによる政治的認知」栗田宣義編『政治心理学リニューアル』学文社，155–174 頁.

堀内勇作・今井耕介・谷口尚子．2005.「政策情報と投票参加―フィールド実験による検証」『年報政治学』2005-Ⅰ，161–180 頁.

池田謙一．1991.「投票行動のスキーマ理論」『選挙研究』第 6 号，137–159 頁.

池田謙一．1994.「政党スキーマと政権交代」『レヴァイアサン』第 15 号，73–103 頁.

池田謙一．1997.『転変する政治のリアリティ―投票行動の認知社会心理学』木鐸社.

池田謙一・西澤由隆．1992.「政治的アクターとしての政党―八九年参議院選挙の分析を通じて」『レヴァイアサン』第 10 号，62–81 頁.

岩崎清子．1992.「世論調査における誤答と回答メイクの影響」『選挙研究シリーズ』No. 10，59–63 頁.

蒲島郁夫・綿貫譲治・三宅一郎・小林良彰・池田謙一．1998.『JES Ⅱ コードブック』木鐸社.

川崎恵理子．1985.「記憶におけるスキーマ理論」小谷津孝明編『認知心理学講座 2 記憶と知識』東京大学出版会，167–196 頁.

Linton, M. 1982. Transformation of memory in everyday life. In Neisser, U., & Ira E. Hyman (eds.). *Memory observed: Remembering in natural contexts*. W. H. Freeman and Co, pp. 77–81.（リントン，M.「日常生活における記憶の変形」ナイサー，U. 編，富田達彦訳．1988.『観察された記憶（上）』誠心書房，94–111 頁.）

Lodge, M., K. M. McGraw, & P. Stroh. 1989. An Impression-Driven Model of Candidate Evaluation. *American Political Science Review*. Vol. 83, No. 2, pp. 399–419.

Lodge, M., M. R. Steenbergen, & S. Brau. 1995. The Responsive Voter: Campaign Information and The Dynamics of Candidate Evaluation. *American Political Science Review*. Vol. 89, No. 2, pp. 309–326.

Lodge, M., & P. Stroh. 1993. Inside the Mental Voting Booth: An Impression-Driven Process Model of Candidate Evaluation. In Iyengar, S., & W. J. McGuire (eds.). *Explorations in Political Psychology*. Duke University Press, pp. 225–263.

宮野勝．1986.「誤答効果と非回答バイアス：投票率を例として」『理論と方法』Vol. 1, No. 1, 101–114 頁.

中村悦大．2006.「多変量長期記憶モデルを用いた政党支持と内閣支持の関係性の分析」『選挙学会紀要』第 6 号，107–126 頁.

Nelson, K. 1978. How Children Represent Knowledge of Their World In and Out of Language: A Preliminary Report. In Siegler, R. S. (ed.). *Children's Thinking: What Develops?* Lawrence Erlbaum Associates, pp. 255–273.

太田信夫．1995.「潜在記憶」高野陽太郎編『認知心理学 2　記憶』東京大学出版会，209–224 頁.

岡田陽介．2003.「投票参加の要因としての社会関係資本」『学習院大学大学院政治学研究科政治学論集』第 16 号，1–69 頁.

岡田陽介．2007.「投票参加と社会関係資本―日本における社会関係資本の二面性」『日本政治研究』第 4 巻，1 号，91–116 頁.

Richardson, B. M. 1986. Japan's Habitual Voters: Partisanship on the Emotional Periphery. *Comparative Political Studies*, Vol. 19, No. 3, pp. 356–384.

境家史郎．2005a.「政治的情報と有権者の選挙行動―日本の選挙におけるキャンペーンの効果―」『日本政治研究』第 2 巻，1 号，74–110 頁.

境家史郎．2005b.「現代日本の選挙過程における情報フロー構造」『レヴァイアサン』第 36 号，146–179 頁.

Schacter, D. L. & E. Tulving. 1994. What Are the Memory System of 1994? In Schacter, D. L. & E. Tulving (eds.). *Memory System 1994*. The MIT Press, pp. 1–38.

Squire, L. R. 1987. *Memory and Brain*. Oxford University Press.（河内十郎訳．1989.『記憶と脳―心理学と神経科学の統合』医学書院.）

Taylor, S. E. 1981. The Interface of Cognitive and Social Psychology. In Harvey, J. H. (ed.). *Cognition, Social Behavior, and the Environment*. pp. 189–211.

Tulving, E. 1972. Episodic and Semantic Memory. In Tulving, E. & W. Donaldson (eds.). *Organization of Memory*. Academic Press, pp. 381–403.

Tulving, E. 1983. *Elements of Episodic Memory*. Oxford University Press.（太田信夫訳．1985.『タルヴィングの記憶理論』教育出版.）